

繪本通俗三國志

四編
八

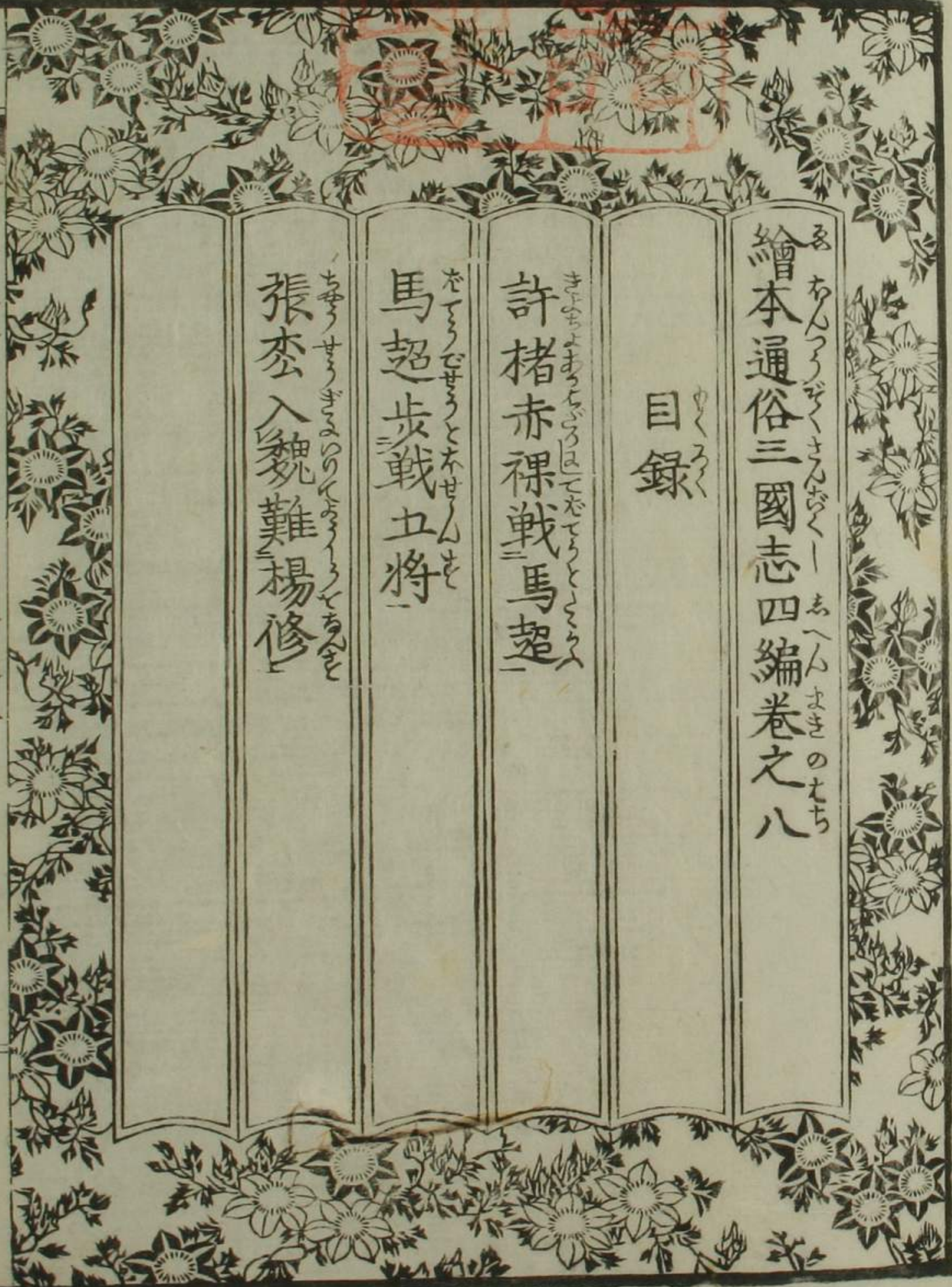
へ 21
221
38



221
38

東京
大學
印

印



繪本通俗三國志四編卷之八

目錄

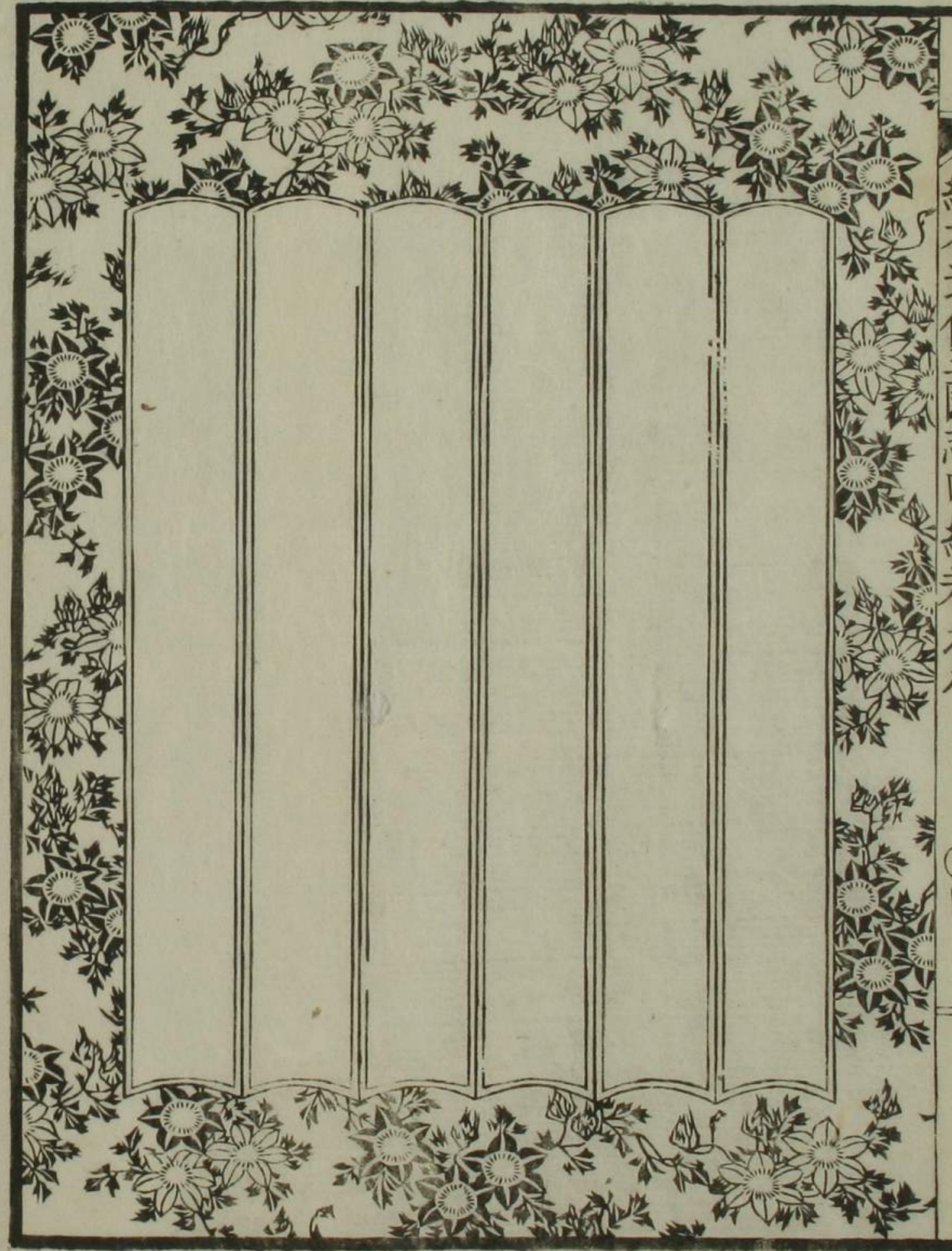
許褚赤裸戰馬超

馬超步戰五將

張遼入魏難楊修

繪本通俗三國志四編卷之八

〇目



繪本通俗三国志四編卷之八

并褚赤裸戰馬超

曹操の渭水の北に陣屋を造らし、馬超西京の精兵と引て日夜を分ち、その勢は雷電のごとくあり、曹操の勢日と重ぬる。陣屋の要害いざあらむ。野陣を取て拒ぎ戦ひし。右に始終あり、とて。俄に船筏を以て渭水の流に浮橋をうけ、南の岸へ相通し、三が所あり。曹仁兵を下知して、河の中をさし、南北の岸に陣屋を建ちて、以てく。材木を運び、兵糧の車を以て四方を囲み、諸軍の中を陣と取て、ふまむ。城を築んとす。西涼の兵あるを以て、馬超は其の由を告ぐ。馬超兵を命じて手ほどし、乾ろる柴を以てせ。

繪本通俗三国志四編卷之八

硫黃焰硝の類を帶て馬超が旗を韓遂が旗と
馬超もさせ二人南北より来て毎日曹操が陣を
と柴をわけて火を付さんぐと攻るも曹操拒むと
得ず陣を走りにりるも三が所より人ある浮橋を
尽く焼て西涼の軍勢大に打勝南の岸に陣を取
て渭水の流を截住し曹操陣屋を作るといふも
さるる打破らるる水の内裏に怖る諸將をわけて
計を議し荀攸が曰く渭水の辺の土をわけて
築地を多し堅く守りて戦ふべし曹操は
人夫三万を遣し土を築地を四方に構へ
んとす馬超もさるる運んで築地を四方に構へ
つて付往来飛ぶとく蒐たりるも曹操は拒む
と殊

大河の辺の土をわけて築地を多し堅く守り
の沙漠を尽く崩れ落さるる計極りいふとんと
苦むとき九月も末に北国の習るる天氣を
冷しく形雲四方に布て数日晴ざりしと
西軍は戦ひ休て雪のそとて相待りる曹操は
諸將をわけて計を議しある忽ち一人の老翁
来りて對面せんといふと求むとある人ぞと
名を問ふも京兆の青松次女その形凡そ
あるといふ人ぞと名を問ふも京兆の人ぞと
終南山に隱居する妻子伯道号は夢梅居士
といふものなりと曹操客の礼をわけて敬ひ
るも老翁が曰く丞相久く渭水の北に城を
築んとする人ぞときく人ぞ時々の用



夢梅亭



て突死さんどぞ人ども曹操が後、眼真圓うして光百鍊の
鏡ふ朱とぞぎたるまどきの大將手、刀をひききげ馬は白沫
をまけて立らるべし、聞る。大カ虎矣とぞ。許褚あらん
とぞ、あへて輕くくはとぞみ得む。すあへち鞭をあげて汝が
軍中、虎矣とぞ。やのありときりし。今いづくへ逃去しと
よ。まへ曹操が曰く。ま虎矣許褚といふ大將あり。あぞ天の
の星を輝らる馬超さへあへて突てうらんとさる。気色さ
へまへ曹操が後より。一人馬とのり上り。まはとるあち雒郡の許
褚ありとぞ。威風傍とぞ。眼の光星のぞく。馬超
もんや怕きたりけん。あへて前へまへんとみせむ。卒に馬と
返して退きけ。ま曹操が又引て回る。両方の軍勢さへとぞ。

駭然たるまへといふ。身の毛を立て怕とあり。曹操諸大
將もむろて。敵も味方も許褚あるとぞ。ま虎矣とぞ。虎矣と
ぞ。いひまへ許褚がいく其の曰うあらむ。馬超とぞ。生取ん曹操が
曰く。馬超が勇力輕く敵がたへ許褚が曰く。其のちうて勝負
と決せんとして使てあへて戦書を送り。虎矣の曰馬超と戦いて
決せんといひ遣しけ。ま馬超さへと聞て大に怒り。あまとして右
をまへとあざむく。ま虎矣が首を取んとて。即時に
批回し。まこの曰両方の軍勢。尽く出て陣勢を張馬超へ龐
徳と左備と馬岱と右備と。韓遂と中軍と領せしめ
けり。鎗と提て馬を躍せ虎矣へとぞ。出ぬぞ。あまとして勝
負とせよとぞ。りらまへ曹操がまへとぞ。諸將と顧み馬超

呂布が勇を減さず。たゞさうよく敵せんといひ。まづ許褚を以て
へて馬を躍せ。刀をまへて駈出。馬超とたゞ二人。火華をちらり
て。百余合戦。馬疲れた。とゆ。軍中へ入て馬を乗る。
又討て出て。百合あり。戦ひ。うご。勝負の色。とへ。さう。へ。許
褚怒。軍中へま。せ。回り。甲。盛。て。ぬ。ぎ。ま。と。て。袍。と。解。て。赤。裸。の
あり。馬。を。打。乗。て。う。け。出。又。馬。超。と。火。と。散。り。て。戦。ひ。ま。づ。西。方
の。軍。勢。震。ひ。怖。る。又。二。人。三。十。余。合。戦。ひ。許。褚。威。て。震。ひ。勇。と
逞。き。う。て。刀。を。あ。げ。て。八。と。砍。ま。づ。馬。超。身。と。を。ち。て。ま。づ。ま。
け。鎗。と。取。の。へ。許。褚。う。心。板。と。突。ん。と。ま。ま。で。許。褚。ま。づ。と。さ。け。て。
その。鎗。と。股。み。た。ま。ま。刀。と。地。に。捨。て。鎗。と。奪。へ。ん。と。ま。ま。づ。馬。超
奪。へ。ま。づ。と。引。合。わ。と。ま。許。褚。喚。声。雷。の。ど。く。卒。中。より。引。抗。

て。手。本。の。う。け。馬。超。が。方。に。残。り。さ。ん。づ。ま。打。合。たり。曹。操。を
と。と。許。褚。が。失。わ。ら。ん。と。と。怖。る。夏。侯。淵。曹。洪。の。兵。を。引。て。出。
よ。と。下。知。さ。ま。づ。龐。德。馬。岱。の。氣。色。と。と。左。右。の。備。と。二。手。に
あ。は。せ。面。を。う。ら。む。討。て。入。その。勢。に。電。光。の。ど。く。ま。づ。曹。操。勢
大。に。許。褚。騎。突。二。筋。射。付。ら。し。と。ま。城。中。へ。逃。入。ら。ま。づ。馬。超。追
討。に。壕。の。辺。ま。で。攻。付。戦。ひ。勝。て。退。き。ら。る。曹。操。へ。あ。び。さ。る。兵
を。討。ま。づ。ま。び。く。守。り。て。出。ざ。り。ら。ま。づ。馬。超。も。本。陣。に。回。て。韓。遂
も。う。ら。ら。ひ。ま。づ。悪。戦。さ。る。と。多。く。と。さ。れ。ど。も。卒。に。許。褚。が
と。ま。ま。の。と。と。ま。づ。真。の。虎。矣。と。と。感。ド。ル。曹。操。馬。超。と
破。る。ま。づ。計。ち。く。兼。て。徐。晃。朱。靈。の。四。千。余。騎。を。付。て。ま。の。へ。渭
水。の。河。より。西。に。伏。置。た。ま。づ。ハ。さ。る。使。を。遣。り。て。早。く。敵。の。後。より

攻められ。大軍で前より蒐り。夾んで討と下知。時
馬超は百騎を引いて。一せ往來馬を飛せて。勇を振ひ。威を輝
かし。曹操大倉の上より。さして。盛と地をあげ。けり。
やう。馬超は尋常の敵あらむ。奴が世あらん。うきうへ。ま
い。して。安んずる。とて。得ん。死して。身も葬る。の地もある。
べ。夏侯淵。ある。と。安んずる。ぬ。と。れ。味方の大将。ね。と。ら
ざる。中。馬超。敵。もの。あ。して。丞相。の。安んずる。と。ら
某。ち。の。命。と。の。あ。と。馬超。と。討死。せんと。なり。卒
み。手。下。の。兵。千。余。騎。と。率。て。門。を。開。いて。出。る。と。曹操。ま。う。ま
と。し。と。耳。を。き。き。一。陣。を。備。えて。立。て。真。地。暗。り。り。に。バ
曹操。も。その。失。あら。んと。と。怖。ま。と。り。馬。の。め。で。尽。く。討。て。出。た

り。馬超。敵。の。出。る。と。て。き。う。み。引。回。して。後。備。で。先。手。と。し。
陣。勢。で。ひ。ら。れ。張。夏。侯。淵。馬。を。飛。て。来。り。と。馬超。鎗。を。拵
めて。突。て。大。勢。の。中。へ。蒐。入。り。て。さ。ん。ぐ。と。戦。ひ。り。り。か。多。心。曹
操。と。付。て。馬。を。飛。て。蒐。り。と。曹操。膽。を。冷。し。馬。を。回。り。て
城。中。へ。逃。走。る。馬超。精。兵。を。馳。て。追。討。と。攻。め。り。と。曹操。大
半。討。て。と。さ。ん。ぐ。と。蒐。り。り。り。馬超。馬。を。飛。て。追。蒐。る。と
と。跡。より。兵。を。走。り。付。曹操。の。と。一。手。の。勢。で。蒲。阪。津。より
渡。り。渭。水。の。西。の。陣。屋。を。う。ま。へ。て。味。方。の。回。る。路。を。塞。げ。り。と。言。え
と。馬超。大。う。き。と。り。と。父。本。陣。を。回。り。て。韓。遂。と。相。議。し。今
曹操。が。勢。の。と。で。う。か。後。へ。廻。り。前。後。を。敵。で。受。て。招。べ。き。便
と。と。い。ひ。り。と。大。將。李。堪。が。曰。く。さ。う。と。と。ま。で。攻。取。と。る。地。と

曹操返。和睦を請ひ戦ひて休春の暖るまで待て。別な計を
する。韓遂が曰く。この計をまゝで良とやく使と遣し。马超猶
豫して。いよいよ決せざりけむ。大将楊秋。茂。二人。まきり。と
和睦をせむ。いよいよ。卒に楊秋。使として。曹操に陣を遣
し。韓遂。马超。地を割て和睦し。再び境を犯さずとあらん。とて
書簡を送り。いよいよ。曹操が曰く。汝が曰く。この日使をい
て。答へ。楊秋。まきり。と。曹操。見えて曰く。今
马超。和睦を求む。丞相の御心。いよいよ。曹操が曰く。汝が意見
をきり。賈詡が曰く。兵不厭詐。と。中せむ。詐を以て和睦を許
し。後。間諜の計をいよいよ。韓遂。马超。疑はせ。一鼓
して破るべし。曹操。手を拍て笑ひて曰く。天下の高見。いよいよ。多

相合。いよいよ。御辺が計。いよいよ。心腹の機密。外に泄さずと
まきり。即時。使を遣し。和睦を求る上。別事あり。と。いよいよ。
曹操。兵を収て都へ回るべし。と。やく。汝が取たる。河より西の地
を回せ。とて。返簡を送り。いよいよ。手下の兵。下知て。傳て。南の岸へ
浮橋をうけさせ。軍を退るの気色。いよいよ。马超。この由をきいて。韓遂
いよいよ。曰く。いよいよ。曹操。和睦せんと約てあり。浮橋をうけて。都へ
回るの体。いよいよ。元より。玄雄。いよいよ。詐の計。いよいよ。
若真の和睦あり。とて。油断。せ。却て。大なる。敗。と。いよいよ。
曹操。大将。徐晃。朱靈。二人。渭水の河西。いよいよ。陣を取
ち。いよいよ。用心。いよいよ。叶。いよいよ。其。將軍。二日。づ。代て。今日。曹
操。が。守。いよいよ。次の日。徐晃。が。いよいよ。兵。いよいよ。分て。前後。い

備へるまふ詭を拒ぐべしとて用心をあらわし急ぎ

馬超歩戰五將

馬超韓遂二人二手に分きて前後を守り和睦の詭をあらわしとて用心をあらわし由曹操が陣をきき入るまふ曹操笑ひて賈詡を呼んで計成就せりとして間者をめめて伺ひし日韓遂此方を守り馬超をのろく徐晃が方を守ると告ぐまふ次の日曹操諸將を引陣をきき入るまふ武具をそろえてたゞ一騎進出たり西涼の軍勢のまふ曹操をきき入るまふのありきまふ我々と生てのまふとせるまふ曹操錦の袍を着て駿馬を跨り大音あげて汝等西涼の勢曹操と相てとんとわたりまふまふ常の人々目四のまふまふ口西のまふまふ世の人々替なるたゞ智謀の深

のまふまふとまふまふ西涼の勢をあらわし曹操人を韓遂が陣を遣しまふ韓將軍ともより仇あつとまふ古の故人たりと一旦事の変まふとてあつと合戦をまふいさ戦を休和睦する上に向後の遺恨をあらわし己の兵を収めてもまふ本国へ回らんとても秘かにあつと一人あつと御土のまふ甲をまふ刀を解て一人陣をきき出て對面せんとて遣し入るまふ韓遂をのろく甲をまふ着るまふ曹操が陣の前をきき入るまふ曹操近々と馬をよせ疎遠の情を述てりまふまふ將軍の父とて孝廉を奉らるまふまふ叔父の礼をめてまふ事たりまふ又將軍と共に官をまふまふおと年月を送しが將軍はまふ年幾ぞ韓遂答て曰く某まふまふ四十歳なり曹操が曰くむろ都を共



許褚

軍卒



馬超

軍卒

許褚怒
素肌
馬超
血戰

計さくみさく應おこじて馬超ばしやうがんの内疑うちがひ怪あやむ疑うたがひ
陣中ちんちゆううらむ乱らんて生なむその乱らんに乗のりてひらう間諜かんてつの計さくて行いひ
韓遂かんすいが手下の大將たいしやうと味方みかたと懐なつてあらむ馬超ばしやうと生取せいけべし
曹操そうそう手と拍うて喜よろこび即時しつじにひらう書簡しよかんを親おへりのあへん
しとあぶしきあて書かけつとあぶく封ふうじてみさくとあやび
ある使つかと仕立して韓遂かんすいが陣ちんに遣つかして馬超ばしやうがききあるやうみさく仕
たりらる案あんのどくまのひと馬超ばしやうに告つぐるやのあり只今ただいまのや
げちるりのよく封ふうじたる書簡しよかんをゆめて韓將軍かんせんぐんの陣ちんに來きき
りとひらむ馬超ばしやうをあらむ猜うひたぢち韓遂かんすいが陣ちんに問とて
曰いくは書簡しよかんのきたりしといふあるもへぞ韓遂かんすいが曰いくは曹操そうそうが音
信しんと通つうざる書簡しよかんあり馬超ばしやうその書簡しよかんを求もとてひらきこるる

諸所しよしよと判はて書かけられた故ゆゑあらんとかやふ不勝ふせう臆おそみさくさだう
あらざるを怪あやむで問とて曰いくは右文字みぎふみじとあらなむ
ひ韓遂かんすいが曰いくはまその人ひとをあらむ本もとより此こゝのどくすて送おく
來きまう馬超ばしやうが曰いくはあんど艸藁そうこうとゆめて人ひとに送おくるといふとあ
らんまといふあらむ我われがききたりていふんとて怖おそえて早はやく書か
あらなむ置おきあらん韓遂かんすいが曰いくは御辺ごへんあらむ人ひとに疑うたがひあそ
量りやうの曹操そうそうのやうにて草稿そうこうと封ふうじて送おくるらん馬超ばしやうが曰いくは我
んまといふ解かいむ曹操そうそうの容易よういなりとあさむ世よに双ふたあさむ女を雄ゆう
ありあんどあやふにて草稿そうこうと送おくるまといふおちうにて汝なんぢと力ちから
とあふせとも曹操そうそうと封ふうじと約やくせりいふあるとていふと變へんじた
る韓遂かんすいが曰いくは御辺ごへんさむといふとて疑うたがひぬ日ひ々々陣ちんと生なて

曹操と呼で對面せんと詐り。二人先日とて馬をふりて詔るべし。御辺にたつらふ藏居てたゞ鎗突死しぬとてさるるの信をぬりしとるらん馬超が曰く。あつらふがの疑で晴さる。次の日韓遂より李堪梁興馬玩楊秋侯選とてきたる馬超とつたつら伏て人々曹操が陣を遣し韓遂將軍孫六くを曹丞相と對面せん。つら馬を出入りしとていひしとて曹操。あまてきいて曹洪とていひせしとて計を私語する曹洪計を受えつらぬ十騎を引て陣を出入りしとて韓遂が前より馬上より礼をちとて曰く曹丞相昨夜將軍の送りぬる書簡の意とてそとて喜とてあつらふ仕損たす。あつらふとて馬を回して城中へ入る。馬超の体とて愈怒り鎗を提

て躍出汝曹操とていひせしとて欺いて殺さん。あつらふとて韓遂と突て蒐る。五人は大将さきよりとて陣中へいひ回る。韓遂再三詐あまきとていひぬる馬超さるる信とて大に怒りて去る。あつらふとてきさるる五人の大将と。あつらふとて義とて楊秋が曰く馬超つねに武勇とてあつらふとて將軍を凌ぐ。あつらふも曹操は勝とて得る。あつらふとて將軍を輕んぬ。某愚意とていひてあつらふとて曹操は降とて長く身の安きとて量りぬる。韓遂頭を擲ていひぬる。あつらふ馬超が父と兄弟の好あり安ど曹操は降る。あつらふ楊秋が曰く馬騰都とて謀反とて起し。あつらふとて曹操は討とた。あつらふ將軍あつらふ人。逆臣の子と扶さる。あつらふとて韓遂が曰く

らべ汝が意見はまたどうぞ。なまの由と曹操は報を
そのあらふ楊秋が曰く某の如く行んとて。即時に書簡
を以て曹操が陣に降参の由を告る。曹操は其外
喜ば韓遂と西涼侯を封じ。楊秋を太守に封じて。其外
の大將を以て恩賞のりれを楊秋恩を謝して本陣に
回り。韓遂の如く。曹操が陣に敬ふよと語り。今夜火
を付けて馬超を内外より攻。曹操が兵を引入て。馬
超を生取んと。いひ。韓遂大に喜び。さう。曹操と
合図を定め乾き。柴を用意して兵の手分を備へ五人
の大將も剣を帯ぐ。側へ侍立し。酒宴を設て馬超を
召し席上より。殺さんとて。計を定め。馬超元よ

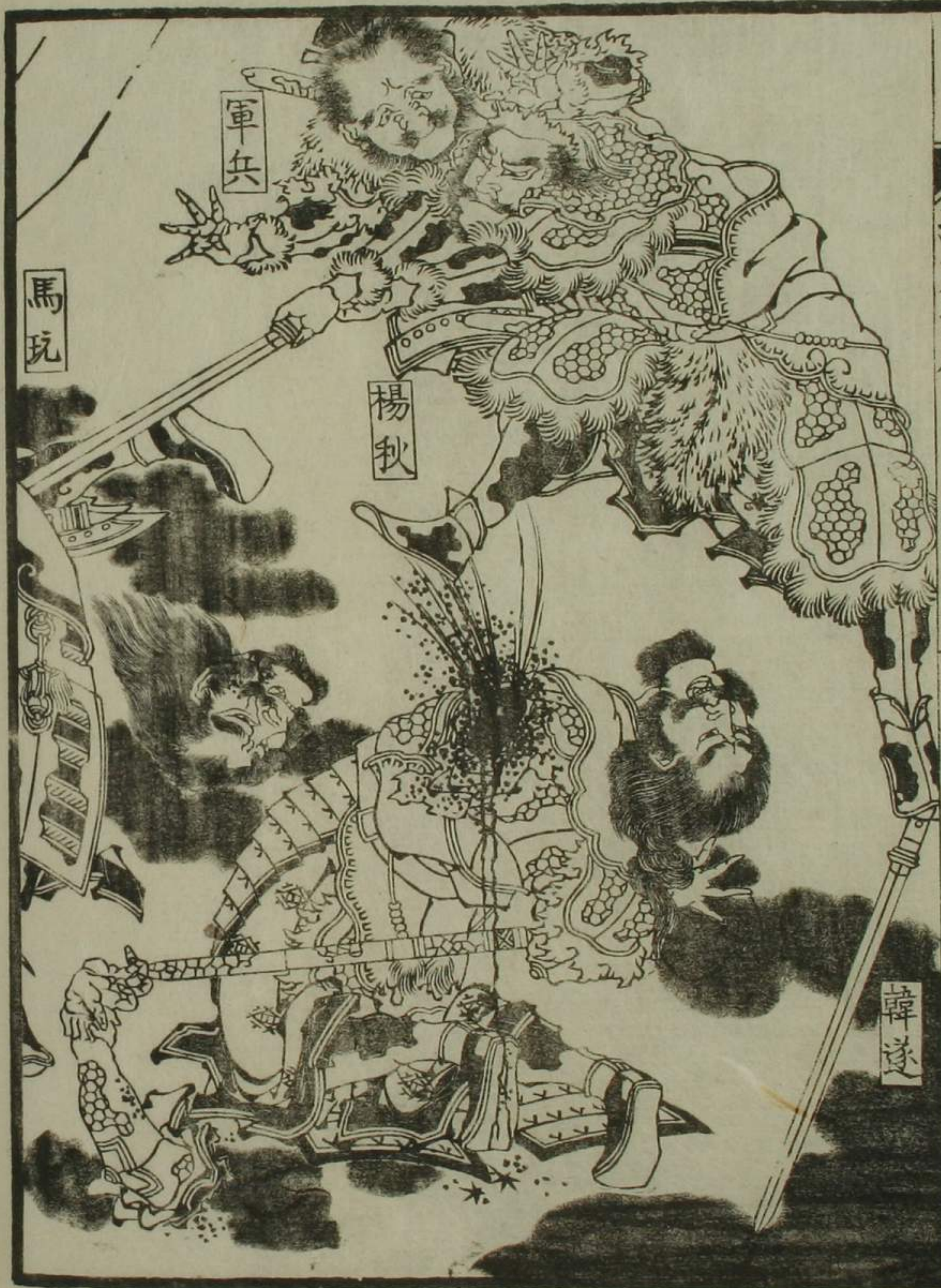
り。疑ひを寄せ招くとも輕く。来と。いふ。計をあると
て。相共評定を。曹操は火の手を。あふ。合図を。とぐ。
黄とて。騎馬の精兵を。處々の詰り。伏置い。とぐ。
待りけたり。馬超は。内の深く韓遂を疑ひ。外に間者
けて伺へせ。今日の気色。徒ら。とて。告る。
馬超は。怒り。即時に龐徳馬岱をよび。汝も軍
馬を備て用心を。と。急る。事あら。と。いふ。
人走り来り。今韓遂五人の大將と。曹操は降参し。將軍
殺さんと計ひ。告げ。馬超は。怒り。さう。五六
騎を。また。龐徳馬岱を後備として。韓遂が陣に馬よ
り飛下。油幕の内を。と。韓遂五人の大將と計を相議し

曹操が大将于禁背より攻来り弓を引て馬超を射たり。馬超早く發音をきき身をよめて避る。矢馬超を射て射超る。前より李堪が背より中り馬より倒れ落て死す。馬超は逃げて于禁の突く蒐りられ于禁の味方と待合る。曹操が大軍前後より取さま許褚と張遼と虎衛の軍を引て真先より雨の降とく矢を放り馬超鎧を破り打落しとあたる蝗の飛ぎ。馬超兵を引て半河を渡り勇を振ひ力と尽しと討破らんとす。六十度まで逃げても敵の囲められとて又橋の上より引く。曹操が大軍次第より追ひて馬超を討破りてやうと危く

とへる。馬超はと喚く大勢の中へ突入る。相從ふ西涼の勢とみ謀慮を隔てらんとて尽く討とる。馬超は逃れぬ。とあつて一騎大勢を蒐破り路を尋ねて生んとする。馬超は射れて馬より落しとて討とる。とへる。とあつて西北の方より一手の勢殺到し真先に進む。龐徳馬はあり馬超を救ふ馬のせ。一方は打破りて西より落行。とへる。曹操の由をきいて問て曰く馬超が兵いづ程あり。と答て曰く千騎ありと。とへる。曹操は曰くさうらば程のり。とへる。汝亦さうくの大將日夜を分む。さうらば追うけと。とれ。とへる。首を取来らば千金を賞し萬戸侯と封じ生取きたらば大將軍の次とせん。と忘る。とあつてと下知しとへる。諸

の大將と先と追う。喊の声天地で碎く。馬超は身も疲
れ馬も弱いて拒ぶべき力なく相従ふ兵も次第に底ど
歩立あつたのでへん生取る。曹操が大勢師と慕てま
る追うけしふ又取て回して大に戦ひけし味方とて
バ只三十騎に討たさる。龐徳馬伏せさる。操立ち其
西臨洮と望んで逃去る。曹操も安んじ安定を追
け馬超が遠く落のびたりとて兵を収めて引回し已
に長安まで来りし。都より荀彧が早馬到来し。は
兵を収め回り多しと催促さる。操も依て曹操もろくの大
將とてあつた。韓遂は左の手で斬落されて残疾の
人となる。曹操とれち西涼侯の職と授て長安にとせ

楊秋侯選亦と列侯と封と。渭水の口を守らせき。涼
及の参軍楊阜字は義山といふ。あり本天水郡の人なり。長
安に來りて曹操を見とて曰く。馬超は韓信英布が勇あり。深
く羌胡の心とぬたり。いま葉と其根と絶たせんと他日氣
力と養ひしと。又大に蔓らんと根がぐる丞相とす。丞相
操曰く。もくくおのあつた。都の中。ふえち。南方は
事多し。くくくあつた。留るべし。御辺とく。為る西涼
守と。楊阜が曰く。尊命。争。おむく。と。得ん。あつた。韋康と
人あり。もく。あつた。涼の刺史と。某と。兵と。領と
冀城と。守ら。馬超。あつた。亡と。曹操。あつた。許
し。楊阜が曰く。丞相。い。都。回り。大勢。長安



馬玩

楊秋

韓遂



馬超

梁興

侯選

馬超憤矣
韓遂等
陣中斬之

のま
と残りといちて。後日の援と志あり。曹操が曰く。さうもどき
その備あり。汝んて安んぜよといひ。さうもどき。楊阜わうれて出たり。
諸大將問て曰く。初め馬超が勢。潼関を据る。渭水の北へ路絶
たり。丞相河の東より馮翊を討つ。却て潼関を守りて
伎は日を送り。後河より北へ渡りて。陣屋を造り。固く守りて。
動きをへざる。へる。へど願ひ教る。曹操が曰く。馬超をトを
潼関を守ら。さうもどき。直に河より東に向ひ。馬超が勢能
諸所の渡を守らん。さうもどき。河西北へ渡る。あたへ。さう
さの。人々。兵を引て。いと潼関を攻る。体とあり。馬超は
力と尽し。南を守らん。さうもどき。河より西へ敵思
もよらむ。守の兵も置ざらん。徐晃朱靈たよと渡りて

てき
敵の後を遮る。とて得たり。其後北へ渡りて。車と連ね
陣を構へ。岸をなぐ堤を築き。水の城をき。い。敵も弱と
さうもどき。さうもどき。驕り。さうもどき。その備あり。と伺ひ。間諜の計を
ちひて。よく兵の力を養ひ。一旦さうもどき。討て。敵は膽をひきさ
む。さうもどき。疾雷不及掩耳。との計あり。兵を用る。変化一
道。さうもどき。諸將又問て曰く。丞相初め敵の大勢
加へ。さうもどき。喜び。さうもどき。さうもどき。曹操が曰く。涼州へ國
遙く隔て。地險阻。これをさうもどき。王化は背く。さうもどき。人々
伐ちんとさうもどき。要害堅固。さうもどき。一二年の平げ。さうもどき。今さう
ぐ。さうもどき。来り集る。さうもどき。人々。さうもどき。兵多く。大將累
れば。一戦に滅ぶ。さうもどき。さうもどき。人々。喜び。諸將拜謝し

一と曰く。丞相の機謀尋常の及ぶものあらざるを曹操が曰く我
 諸將の力を頼み。幸に勝て得たりと。おのれ恩賞を施し。
 夏侯淵を長安にとめて。塲を守らしめ。復に夏侯淵が曰く。某
 命を受く。その名を守り。馮翊高陵の人。張既字は德容と云
 人のあり。おのれを京兆の尹として。も長安を守り。曹
 操が都へ回り。即時に張既をちり出して。京兆の尹として。兵を
 収めて。都へ回り。献帝みづから雋鳥興を召して。鄩をせめて。む
 らへ。曹操と貴人。賛拜を名を云。朝へ入る。趨らず。
 剣を帯履を脱ぎ。殿へ上り。漢の相國蕭何をくたよと許
 して。ひく。曹操が威勢。いよく振る。内外とも怖まを
 いふとある。

張松入魏難楊修

この比漢中。張魯字は公棋といふもの。その祖父張陵
 とひく。その蜀の鶴鳴山にあり。道書を作り。世の人を惑
 らしめ。人をおへ。それを敬み。張陵を死し。其子張衡
 この道を行ひ。も道を學ぶものあり。米五千をせ。是
 こよめて。世の人を米賊とぞ号しける。張衡已に死し。張
 魯又この道を行ひ。漢中にある。師君と号し。米を
 學ぶもの。お号し。鬼卒といふ。その頭たるものを祭酒と号
 し。大勢の衆を領するもの。治頭大祭酒と号す。その務を
 誠のふで。詐をき。本をり。病る人あれば。行て壇の
 前。静室に入り。みづから尸が過を。當面を。懺悔

しむ。禱と求るの法は病人の名字を書き、罪は服するの意を
説く。三通の文を造る。一通は山の頂にあげて、天に奏し、一
通は土に埋め、地を奏し、一通は水底に沈め、水官に申し、おれで
三官に名を、手自書し、その病を全くとすを得たり。米五
斗の賂を以て、義舎と蓋ひ、舎内に米、柴、肉を貯へ置、集
る人より、食するも、もく多きとすべし。天の罰を受法と犯する
もの、先三度恕し、改めざれば、そのちの刑を施す。おまは依
る。三十余年を、巴蜀の地は雄据せし、人ども天下を乱る。と
國遠く、征伐せし難く、却て張魯を鎮南中郎將と
封じ、漢寧の太守と領せしめ、毎年御貢を献じしめ、その
とき、漢中の百姓、地を墾て、二川の玉璽を得たり。おまは張

魯を進めて、曰く、近比西涼の馬超破れ、曹操よく逆威
を專ふ。劍と帶履を踏む。朝廷は出らざる。又その人攻め
たり。師君は、漢寧王の位に即ち、防備の備え
を、人々を闇圃といふ所の、生とせし、漢川の民戸數十
萬あり。財豊、糧足り。況や四方を、險阻あり。一夫を
守るも、卒に通ることを得ず。上天子と臣とを、
桓文とあり。次に、寶融、及ぶ。今馬超破れ、西涼の
百姓奔る。子午谷より、漢中へ移るもの、数万家あり。蜀
の劉璋は、才なく、智昏く、國を守ると、あたはず。おまは兵を起し
て、蜀の四十一万と取る。本として、そのち王位に、即ち張魯大に
喜び、弟張衛を大將とし、蜀を攻めんと企てず。蜀の劉璋

とやまへ字に李王もとま。漢の魯恭王の後胤より劉焉字
の君朗が子あり。曾て張魯が母あらば兄弟を殺しつべしと
より。互に仇をむき。大将龐義とて巴西の大字より。
常は張魯と拒む。あのととも龐義急て告て張魯兵を起て
攻来らん。と企ると。報より。劉璋平生懦弱より。大臆
病する。人の注進をきく。の内大に怖ま。いそぎ諸大將を
めり。評議する。とま。人をもみ出て曰く。君御にや
ふ。人某不才あり。とく。三寸の舌と動て張魯兵
を退くべし。諸人あれと。益々成都の人。張松字を求
年あり。あの人身の長五尺。満も眞塾。齒露れ。頭尖りと
額に鐙のどく。舌大より。鐘に似たり。今蜀の別駕に任ざら。劉

璋。問て曰く。汝い。計り。張松が曰く。某素より。魏の
曹操へ。中原を掃ひ清め。呂布。二袁を滅ぶ。南へ
江漢を平げ。北へ燕。抵る。近ある馬超を破りて。天下
敵するものなり。今君禮物を。曹操と頼む。某松が
い。都へ行く。曹操を見。大軍を。張魯を伐らん。
ある。張魯い。蜀を望み。得ん。劉璋が曰く。汝を
去ぬ。建安十三年の冬。荆。行。曹操を見。人
と。輕ん。恨む。今又行。人。張松が曰く。曹
操。安ん。人。暇あらん。今都の中。文武の
群臣。事と執行。其利害を。説。曹操を

大軍と引く。張魯と伐ん。劉璋が曰く。今試み汝が曹操
と説き利害をきかん。張松が曰く。某が曹操と説き馬超
英雄人。勝る。韓信黥布が勇あり。丞相父を殺る。仇い
はまづ。戦ひ破る。後あらざ。仇を報ぜん。今漢中の
張魯兵精く。糧足れり。百姓たてて尊ん。漢寧王として。久
く。必も又帝位を僭せん。若帝位。即ば。急
中原を犯さん。其れ。その手下。良大將と。欠馬超。急
仇を報ぜん。の。あ。る。も。龐西の兵。の。張魯
従へん。張魯。馬超と用る。虎。翼。添。る。の。
戦ひ。馬超。従。漢中。乃
備。速。攻。一鼓。破。之。と。これ。利

害と説機。隨く。變。應。曹操。許容。今若
延引く。張魯と。攻。来。る。と。横。秦。張儀。が。辨。あり。と。
曹操。又。従。へ。と。悔。る。と。劉璋。大。喜。ひ
金珠錦綺。と。調。へ。と。禮物。と。備。へ。と。張松。と。使。と。都。
赴。張松。の。中。と。兼。之。深。き。所。存。あり。と。西蜀四
士。の。地理。と。繪。圖。と。寫。し。従。者。十。騎。と。引。く。都。上。る。路。
と。の。由。と。き。く。の。あり。早。く。荆。及。へ。報。と。孔明。と。告。と。言。
ま。孔明。兼。之。蜀。と。取。ん。と。の。あり。今。張松。が。魏。と。行。と。き。い。て
ひ。と。人。と。遣。し。都。の。消息。と。尋。ね。聞。く。と。去。程。と。張松。は。な。ち
と。都。へ。上。る。驛。館。の。中。と。留。り。と。毎。日。相。府。と。伺。候。と。曹操。と。見。へ
んと。と。求。む。と。の。とき。曹操。ハ。鄴。都。より。回。り。て。と。逆。威。と。擅



一。物表に傲睨して。天下の政務をひとせむ。日夜酒宴を
 出るとある。たゞ色色よの。弱き居たり。そのゆへに第三の日張
 松姓名で通じるとして得る。左右近侍のものを。賂と貪り
 日と経る。曹操に見しむ。曹操堂上を坐して。張松再拜して
 前より立り。さへもれを問て曰く。汝が主劉璋は。あるとて。ね年
 御貢を獻ぜざる。張松答て曰く。蜀道は。天下の險阻なり。容
 易く越がたき。盜賊多く害をなす。おまよひ。御貢を。お
 きたる。曹操志を。曰く。まゝ中國を掃ひ清く。坐し四方
 を治む。さうへ。盜賊の害ある。張松答て曰く。南は孫權の
 り。北は張魯あり。中は玄徳あり。その外十方二万の勢を集て
 盜賊とあまやの。そのねとあらむ。安んぞ太平と。べき曹操是

ときいて。の中怒て発し。やが張松が人物惡く。容をあらで賤
 せし。又その詞の内。まて衝意あり。と。あひま。さきう。座と
 起袖を拂て後堂へ入しけり。左右近侍のものを。與て醒し。汝今
 外國の使として。さう来り。詞を。丞相の御心と怒し。幸
 丞相の寛仁ある。と。遠方の人。面を。責む。汝早
 く回るべし。といひ。張松あざ笑て。蜀の國は。媚諂ふ佞
 人。あるといふ。さき。階下より。一人を。み出さ。汝が國は。諂佞
 人。あるを。都の中。諂佞の人。あるを。いふ。張松
 さま。さき。神貌清白。と。眉薄く眼細き。即ち私農の人
 なく。大尉楊彪が子司空楊震が孫一門。は六相三公。と。揚
 修。字は徳祖と。曹操が門下の郎中。と。内外倉庫の主簿

たり。とき年二十五歳。もとより博學。辨舌と巧み。智
 識敏捷。一々。天下の人。て屑とせむ。今張松。祠の内。議。會
 む。意ある。て。い。て。迎。之。書院。に。出。賓。主。を。け。て。坐。定。り。
 問。て。中。の。蜀。道。の。險。阻。を。御。辺。遠。く。苦。勞。を。經。る。人。張
 松。答。て。曰。く。君。の。命。を。受。て。い。豈。万。里。の。遠。を。辞。と。ん。ん。や。湯。を
 入。火。を。踏。と。い。へ。ど。も。ま。る。ん。ど。され。て。厭。ん。楊。修。問。て。曰。く。御。辺。の。國
 古。の。益。久。より。路。は。錦。江。の。險。あり。地。は。劍。閣。の。雄。に。連。ち。り。廻
 二。百。八。程。縱。横。三。万。余。里。雞。鳴。狗。吠。相。聞。く。市。井。閭。閻。を。ま。る。く
 断。ち。て。土。肥。地。茂。く。歳。は。水。早。の。夏。ま。る。國。富。民。榮。く。時。は。官。民。結
 の。樂。あり。土。産。の。阜。ある。山。の。と。く。は。積。ぐ。天。下。の。是。と。い。ふ。人

楊修又問て曰く。蜀中の人物。孫が。その。詳。を。き。く。張。松。が
 曰。く。文。は。相。如。が。賦。あり。武。は。管。樂。が。才。あり。堅。は。仲。景。が。能。あり。ト
 又。君。平。が。隱。あり。九。流。三。教。の。ね。は。土。を。其。の。萃。と。後。の。の。の。げ
 て。ね。て。死。に。が。楊。修。又。問。て。曰。く。い。ま。御。辺。の。國。大。將。なる。人
 幾。う。の。か。張。松。が。曰。く。文。武。並。備。り。智。勇。も。全。く。忠。義。慷
 慨。の。士。百。で。め。て。ね。る。其。が。ど。き。不。才。の。輩。の。車。に。載。り。ま。て
 量。と。も。その。ね。と。ま。る。く。楊。修。又。問。て。曰。く。御。辺。の。い。ろ。の。か
 職。ぞ。張。松。答。て。曰。く。な。り。は。別。駕。の。職。と。務。む。不。才。の。身。は。稱。い
 ぬ。抑。も。御。辺。に。今。い。ろ。の。職。ぞ。楊。修。答。て。曰。く。ま。は。一。丞。相。府。の。主。簿
 あり。張。松。が。曰。く。ま。は。御。辺。の。大。名。と。ま。る。く。ね。代。替。の。家。と。て
 父。祖。尽。く。輔。相。の。位。は。登。り。る。ま。る。ん。ど。御。辺。の。廟。堂。の。上。に。立。く。天

子と佐け四海の政と專みせざしと。統と賤しと丞相門下の主簿と居りしを楊修とせしときと。この内は慙愧し顔と赤しと答へ曰くは卑し官は居しとせざる丞相常は軍中兵糧の重任と委せり殊は日夜傍を離さざり丞相の教と蒙るは是よりしてその職と務む張松めざ笑て曰くは聞曹丞相は文ゆゑで孔子の道と明む武ゆゑ孫吳が機と達せむ専ら威とゆゑ強霸の道と務むと安んぞ御辺を教たしむりあらん楊修が曰く御辺は辺隅の蜀は居しと安んぞ丞相の英才とあらん今御辺はまじしむべしとて左右の令より箱の中より一卷の書と生しと張松とせしむ張松とせしとれば外は孟徳新書と題せり首より尾に至るゆゑのまじく

ことなる。も十三篇あり。とある。兵法の要道あり。張松といふ
 人にて問て曰く。あの書ていつある物と。いひし。楊修が曰く。是
 へ曹丞相の古と酌ぐ。今も準へ。孫子十三篇は擬し。と作りし書
 あり。よき。よき。よき。孟徳新書と号す。御辺いふ丞相と不才に
 といふ。あの書ていつて其大才とあれ。あは後代の模範あるを
 張松よりて曰く。あの書は蜀の國三尺の童子もよくさとす。と
 暗誦する。とある。新書と云ふ。昔戰國のとき。作りし
 書より。作者の名とある。曹丞相いふ。盗んで
 する。能とし。よき。御辺て敷き。あり。楊修が曰く。丞相の
 の書と秘藏し。いふ。曾て他人にせせむ。とある。御辺の國
 三尺の童子も暗誦とある。とある。詐といふ。張松曰く。我

ちんぞ詐人御辺も疑のんあらば、試み暗誦人楊修
 が曰く、修がく、一返できん張松をあらち孟徳新書を誦み、
 首より尾に至るまで、一字も差とあらり、るば楊修大に愕き、
 席を下り再拜し、御辺一覽し、一字も残さず誦み、
 といふ、二人手と打て笑ひ、楊修の中、張松が大才と奇
 ると、御辺き、く、その不居人某丞相より、二度
 對面せさせんと、相府へ行て、曹操に見せさせ、丞相より、
 蜀の使張松と慢め、と問はる、曹操が曰く、その容醜
 しく、祠の内、とて裁意あり、と、そのゆへ、喜ばず、楊修が
 曰く、も、貌をみて、人を取ば、恐る天下の士と失へん丞相昔
 祿衡と人忍んで用ひたり、いふ、ちんぞ張松と棄る、曹操が

曰く、祿衡、その文章世に播き、と、そのゆへ、我と志の、張
 松、又いふ、能く、楊修が曰く、その人海と倒す、江と
 翻へ、その辨風を嘲り、月と弄の才あり、と、丞相の撰
 む、孟徳新書と二度と、即ち、暗に誦み、一字の差
 なく、水と瀉が、浩る博聞強記の才へ、世に罕ある、
 と、その書へ、戦国のとき、無名氏の作る、と、
 蜀の國、三尺の小兒、よく暗に誦み、や、曹操が曰く、
 丞相の書と撰み、その、古人と、暗に合はれ、その、
 とて、引き、其書と焼く、楊修が曰く、わ、再び丞相に見へ
 んと、丞相が、對面あり、大國の氣象と、
 め、曹操が曰く、その人遠く来と、兵と用ひ、と、

も。おれより。大言と生と。明日は西教場に出と。勢揃とあ
さん。汝より張松と。もあひ来と。大將士卒の壮と。こ
ちより。吳と平げて。次蜀と滅む。揚修命と受
て。次の日張松と引て。西教場に出り。曹操と。虎衛の雄
兵五万余騎と率と。四方八面と隊伍と乱さず。備と立甲袍
燦爛と。戈戟の光霜と凝と。旌旗風とひる。人壯馬
強。張松目と斜と。ぞと。と。曹操前より。と
問て曰く。汝蜀の國と浩と。英雄の士卒あり。張松答て曰く。
蜀の國は卒はかくのとき。兵革と。但仁義と。天と治
んと。曹操と。の中と。怒り。色と。相凌の
れ。張松昂然と。金く。怖るの意と。目と斜と。相凌の

氣あり。楊修と。目加と。張松と。少も怖と。時と
曹操と。天下の輩と。芥のごと。大軍の
戦と。勝と。攻と。取と。いふと。人て用ひて富貴と。
順と。生と。死と。たよく。人て用ひて富貴と。
張松曰く。げも丞相の兵と率と。向と。戦と。勝と。攻
れと。必と。取と。元と。曹操曰く。汝も
で。何と。服と。張松曰く。丞相む。僕
陽と。呂布と。攻宛城と。張繡と。戦ひ赤壁と。周瑜と。伯と。華陽と。
関羽と。潼関と。鬚と。切袍と。棄と。と。天と。
敵と。曹操と。怒り。憎と。腐儒者と。我旧失

ちやいへど。駐てあたる早。刊半と。首を斬れり。武
士に命つけば。楊修きく。諫め曰く。今張松が罪斬てさ。何
べとや。せど。蜀道の難所を経て。遙々と御貢と奉来れり。今
あまを殺し。ふ。恐る。蛮夷の。傷ら。知や。の。人。不遜
の。詞。生。斬。なり。と。知。あ。の。承。相。と。礼。物。の
少。き。を。殺。し。人。り。と。沙。汰。と。命。と。助。て。回。り。更
曹操。の。怒。の。気。休。ま。り。と。荀。彧。又。強。諫。し。曰。く。命。を
り。と。宥。し。と。乱。棒。を。打。出。し。張。松。門。外。に。打。出。され。空。く。國。に。入
ら。ん。と。走。け。ぬ。中。に。思。ひ。り。と。本。曹。操。の。蜀。の。國。に。献。ら
ん。と。来。り。と。計。し。人。を。輕。ん。と。此。の。ど。く。無。礼。なる。人
し。と。已。に。國。に。出。るとき。諸。人。の。前。に。大。言。と。生。り。今。若

いた。ば。ら。回。り。と。諸。人。の。物。笑。た。る。と。荆。の。劉。玄。德。に。漢。室
の。皇。叔。と。て。仁。義。久。く。四。海。に。あ。み。今。と。ま。れ。し。荆。の
い。と。り。あ。の。人。を。試。し。別。に。思。案。を。運。さ。ん。と。て。馬。の。り。從。者。と
路。を。い。ひ。で。荆。の。塚。に。望。み。進。み。で。郢。の。近。付。け。と。向。う。と。隊
の。軍。馬。四。五。百。騎。が。ち。と。出。来。り。真。先。なる。大。將。馬。上。より。問。て。曰。く。
あ。ま。来。る。い。蜀。の。張。別。駕。に。て。る。と。張。松。答。て。曰。く。志。う。り。御。辺
へ。又。い。う。る。人。ぞ。の。大。將。と。ま。と。き。と。ひ。と。と。馬。より。と。下。り。
趙。雲。久。く。あ。の。名。を。待。て。り。と。張。松。問。て。曰。く。荆。の。趙。子
龍。に。て。り。趙。雲。が。曰。く。某。主。人。玄。德。の。命。を。受。大。夫。の。遠。險。阻
と。馳。て。り。と。の。路。を。も。御。通。あ。ら。べ。酒。食。と。た。て。り。と。旅
程。の。勞。と。あ。ぐ。さ。り。國。の。塚。に。で。送。り。と。せ。と。某。と。て。む。う。へ



まむとて士卒を命じて酒肴をささげ坐す。さうら地をいざま
づいて進んでおれと進めば張松の内にあひひる人とお女
徳の寛仁よくて客を愛するやいひが今果して此のどし。さあ
みては曹操の謾人として軽んじて礼義をあらね。奸賊なりとて。
卒に趙雲と叔孟を傾けしめて馬をさるるべし。荆の塚のいこり。
日とて暮る及んで驛館の前に着けし門外に百余人二行を
かきて侍立し。鼓を打て相迎。一人馬の前をさるる礼をさるるや
ける。其の荆の大将関羽なり。主人玄徳の命で受驛館をさ
らるる。大夫とむつむ張松馬より下て館中に入らせし。関羽酒
宴をさるる。終夜をさるる。次の日驛館を出て関羽趙雲を伴
い馬を早めて五六里をうり行けし。向より一族の人馬出来り。

真先ちうへ漢の劉皇叔を左に伏龍あり右に鳳雛あり。さるる
張松がきたるをさるる。まどぐと馬より下けし。張松をさるる。ま
へまどぐと礼を施す。玄徳の曰く。さるる。大夫の高名をさるる
て。雷の耳をさるる。恨らるる。雲山路遙かして。いざと教をさるる
て。あなを今都より國を回りし。さるる。あなをさるる。さるる。相迎
幸なり。棄るる。さるる。荆の二伴は行て。片時渴仰の情を叙
ん張松大に喜び馬を双へて。荆の入りけし。玄徳席をさるる
けて。あなを持成たる。よのほねの物語して。さるる。蜀中のさるる
問む。又劉璋が安否や。云む。酒宴を叙し。さるる。張松も
玄徳のさるる。同く。従ひて。答ふ。と。あなをさるる。始終その同
さるる。さるる。張松の問て。さるる。今皇叔を荆に守

東^{あづま}孫^{そん}權^{けん}ありて常^{つね}鯨^{けい}吞^{とん}の志^しと^う。北^{きた}曹^{そう}操^{そう}ありて母^{はは}虎^こ踞^{きょ}の威^いを^して^は常^{つね}一^{いつ}心^{しん}の地^ちを^めら^せて^は玄^{げん}德^{とく}の^まま^にも^とより^もあ^まて^はあ^れど^も身^みを^あん^をぎ^まる^をい^やと^得て^は張^{ちやう}松^{そう}が^いく^西蜀^{しやく}の^ち地^ちに^は四^し方^{はう}を^あ險^{けん}阻^そみ^て。沃^{わく}野^や千^{せん}里^り民^{みん}殷^{いん}の^こ國^{こく}富^ふ帶^{たい}甲^{かう}十^{じゅう}万^{まん}と^て天^{てん}府^ふの^こ國^{こく}を^あり^て。知^ち臾^ゆの^し士^しと^あ皇^{こう}叔^{しやく}の^こ德^{とく}を^あ慕^ぼと^して^はい^ま荆^{けい}楚^その^{へい}兵^{へい}を^引て^は其^{その}の^こ國^{こく}を^取り^て。漢^{かん}室^{しつ}を^あ慕^ぼと^して^は目^め前^{ぜん}を^あり^て。玄^{げん}德^{とく}の^いく^争を^あり^て。其^{その}の^こ國^{こく}を^保ち^て恩^{おん}沢^{たく}を^あり^て。百姓^{ひやくしやく}を^あ布^ふ施^して^は他^た人^{にん}を^あん^をぎ^まる^をい^やと^得て^は張^{ちやう}松^{そう}が^いく^其の^ま主^{しゅ}と^{して}。富^ふ貴^きを^あ求^{もと}む^をめ^らせ^て。今^{いま}君^{きみ}の^こ德^{とく}を^感ず^て。肝^{かん}膽^{たん}を^あり^て。主^{しゅ}人^{にん}劉^{りゅう}璋^{ちやう}久^く。蜀^{しやく}を^保ち^て。天^{てん}姓^{せい}暗^{あん}弱^{じやく}を^あり^て。賢^{けん}人^{にん}を^用ひ

て^は國^{こく}を^治る^をと^めら^せて^は。志^しの^こを^あり^て。張^{ちやう}魯^ろ北^{きた}の^{かた}漢^{かん}中^{ちゆう}を^あり^て。文^{ぶん}武^ぶを^あり^て。賞^{しょう}罰^{ばつ}を^あり^て。正^{ただ}む^を。人^{にん}の^こを^あり^て。離^{はな}れ^て。有^{ゆう}德^{とく}の^き君^{きみ}を^あり^て。人^{にん}と^{して}。其^{その}の^こ度^ど都^とを^あり^て。曹^{そう}操^{そう}漫^{まん}を^あり^て。逆^{ぎやく}威^いを^あり^て。振^はひ^て。女^{にょ}雄^{ゆう}を^あり^て。君^{きみ}を^あり^て。料^{りょう}を^あり^て。漢^{かん}朝^{てう}の^{かた}大^{だい}を^あり^て。君^{きみ}を^あり^て。蜀^{しやく}を^あり^て。基^きを^あり^て。次^じを^あり^て。漢^{かん}中^{ちゆう}を^あり^て。攻^{こう}取^{しよ}を^あり^て。中^{ちゆう}國^{こく}を^あり^て。再^{また}漢^{かん}室^{しつ}を^あり^て。天^{てん}朝^{てう}を^あり^て。正^{ただ}む^を。名^な青^{せい}史^しを^あり^て。記^きを^あり^て。万^{まん}代^{だい}を^あり^て。及^{およ}べ^て。君^{きみ}果^はて^は。蜀^{しやく}を^あり^て。取^{しよ}を^あり^て。其^{その}の^こ大^{だい}馬^ばの^{らう}を^あり^て。内^{ない}應^{いよう}を^あり^て。扶^{たす}べ^て。玄^{げん}德^{とく}の^いく^深く^{先生}の^{しん}恩^{おん}を^あり^て。感^{かん}ず^て。今^{いま}國^{こく}を^あり^て。同^{どう}宗^{そう}と^{して}。戦^{いくさ}ひ^て。天^{てん}下^かの^こ人^{にん}を^あり^て。笑^{わら}ひ^て。罵^{のの}し^め。張^{ちやう}松^{そう}が^いく^君天^{てん}の^{とき}と^{して}。人^{にん}の^こを^あり^て。若^{ごと}く^人の^こを^あり^て。天^{てん}の^{とき}を^あり^て。背^{せい}を^あり^て。恐^{おそ}く^て。日^{にち}月^{げつ}

いよいよ晩く大夫の世に居るに努力して功業を立て人より先
鞭を著す。今一時の計で取らば他人に取れ
後悔も及ぶ。玄德の曰く。蜀の道千山万水
我として車軌を方るに克く馬を繋ぎ聯るを得ず。若
されと取らば計を用ひて張松箱の中より二巻の繪圖を
出と曰く。某深く君の恩徳を荷すの由を之で献る。この圖
を御覽あらば蜀道の地理とありき。玄德は喜ん
多を詳に地理と写して行程の遠近地形の廣狹山川の險要
府庫錢糧戸數に至るまで一に明白なり。張松又曰く。君速に思
召立ち人某深く交る心友二人あり。法正字は孝直と孟達字
は子慶とあり。この二人を來さば方某がとく事と義と人
を送る

玄德手を拱して謝して曰く。青山不老緑水長存他日あるに
先生の恩を報ぜん張松が曰く。某は仁義の主と遇て情を尽
てやと人ばあらば安んぞ報て望みなりと。相別をければ孔明
龐統は長亭の下に再拜し。関羽趙雲は遠く数十里の外に
送る

